

描かれた明治のニッポン

～ジョルジュ・ビゴーが描いた世界遺産 日光の社寺～



■ 日光と訪日旅行の歴史

初冬の日光は、観光客で賑わいを見せた紅葉の時期が過ぎると、落ち着いた雰囲気を取り戻しますが、かつてのような静けさは感じられなくなったようです。「東武日光」駅から日光街道を歩くこと約20分。大谷川おおたにがわにかかる橋の左手に朱色の神橋が見えてきます。世界遺産「日光の社寺」の入口です。お目当ての東照宮までは、さらに約15分、なだらかな坂を登り、とても良い運動になります。

さて、ここに到着するまでに、何十人もの外国人とすれ違いましたが、殆どが欧米人です。昨今の訪日ブームを実感する瞬間です。10年前には考えられない光景ですね。今年の訪日客は、既に年間3,000万人を超え、過去最高の記録を更新する見込みです。コロナ禍以前は、訪日外国人の多くは中国人でしたが、今年は欧米人の姿を多く見かけます。コロナ禍以前と比較すると、大雑把に言って、中国人は約3割減、欧米人は3割増です。また、日本人の海外渡航者数は約1,300万人を超える見込みで、訪日客の方がはるかに上回っています。

では、この訪日旅行ブームは、一体いつから始まったのでしょうか。この数年かと思いきや、その歴史を紐解くと、実は明治初期から始まっていました。現在とは比較にならないほど小規模ではありましたが、明治時代から欧米人は日本各地を訪れ、特に日光は人気の観光名所となっていました。1893年には「喜賓会きひんかい」という外国人誘致の民間機関が発足し、観光事業の礎が築かれました。その後、鉄道の普及に伴い、横浜港などから入国した外国人観光客は、富士山方面や日光方面へと足を運ぶようになりました。1899年には条約改正によって治外法権が撤廃され、外国人も日本国内を自由に旅行できるようになり、訪日旅行ブームが始まりました。ただし、明治時代に「訪日」という表現は使われていませんでした。日光は、標高も高く、夏でも過ごしやすいため、避暑地として人気が高まりました。明治初期には、1,000人以上の外国人が日本政府に雇われ、文明開化が進む中で、彼らは法律、金融、医学、建築、美術など様々な分野で、日本の近代化に貢献しました。今回テーマとして取り上げたフランス人画家「ジョルジュ・ビゴー（1860年～1927年）」も、その中のひとりです。

■ 画家ジョルジュ・ビゴー



ジョルジュ・フェルディナン・ビゴー
1882年4月7日：来日初の誕生日、横浜で撮影
平凡社『別冊太陽 日本のあるところ 95
ビゴーがみた世紀末ニッポン』

ビゴーと言えば、この風刺画『魚釣り遊び (1887年)』で有名ですね。皆さんも、教科書などで見たことがあるのではないのでしょうか。ビゴーは、1860年にパリで生まれ、名門「エコール・デ・ボサール」で学んだ本格的な洋画家です。1878年のパリ万博で「ジャポニズム」に魅了され、1882年に来日しました。その時代は、印象派の画家たちが脚光を浴び始めた頃です。来日後は、陸軍士官学校で美術教師を務めたり、中江 兆民なかえ ちやうみんの私塾でフランス語を教えたりしながら、生計を立てていました。その後、生活が安定してくると、日本の風刺漫画を多く描くようになり、徐々に名声が高まっていきました。もともとは洋画家ですが、日本では水彩画も多く描いています。風刺漫画雑誌『トバエ』を刊行したことも注目されました。そして、ビゴーが好んで描いたのが、世界遺産『日光の社寺』です。その1枚が『日光・東照宮の祭り』で、この作品は、油彩ではなく、水彩で描かれています。

■ ビゴーの描いた日光



日光 東照宮の祭り / 1860年 / 宇都宮美術館「ビゴー・コレクション」蔵

『日光 東照宮の祭り』から、お祭りの賑やかさや楽しさが伝わってきます。奥には東照宮が描かれていますが、この作品は、東照宮よりも、お祭りの行列を主題にしているように見えます。東照宮を描く画家の多くは、その建物自体を主題としますが、この作品は少し異なる見方です。ビゴーが描いた日本人は、日本人に見えますよね。……なぜこんな当たり前のことを言うかと申しますと、一般的に外国人の描いた日本人は、その表情や仕草が日本人らしくないことが多いからです。日本人の画家が、イギリス人やフランス人を描き分けるのに苦労するのと同じように、外国人画家が日本人を日本人らしく描くのはたいへん難しいことです。ビゴーのこの作品では、描かれた人物がすべて違和感なく日本人に見え、まるで日本人画家が描いた作品のように感じられます。こ

れが、ビゴの素晴らしい点だと思います。

ビゴの水彩画の特徴は、色調が柔らかいことです。赤、青、緑など、どの色も原色そのままではなく、少し薄い色調で描かれています。また、ペンで描いた上から、ほど良く着色をしています。画面全体を埋め尽くすのではなく、塗り残しの部分をあえて残すことにより、空気感が生まれ、作品全体に柔らかさが感じられます。この作品には窮屈感がありません。ビゴがパリで学んだ時代は、アカデミックな古典的絵画が手本とされ、キャンバスに塗り残しがあることは認められませんでした。そのような教育を徹底的に受けてきたはずのビゴですが、その影響は感じられません。洋画家が描く水彩画は、油絵っぽくなりがちですが、ビゴの作品にはそのような印象はなく、水彩画と油彩画の違いをしっかりと理解していたことを窺えます。ビゴは日光に限らず、日本各地の風景画や人々の営みも描いていますが、この作品と同様に、どれも柔らかな印象を受けます。

■ ビゴの描いた風刺画

ビゴの風刺画についても、少し触れてみたいと思います。皆さんも、この3作品をどこかで観たことがあるのではないのでしょうか。

【魚釣り遊び (1887年)】

ビゴの作品の中で、私が一番記憶に残っている作品です。この作品では、日本と中国(清)が魚(李氏朝鮮)を釣り上げようとしている隙をロシアが狙っている、という、東アジアの情勢を風刺しています。その後、1894年に日清戦争が勃発しました。



魚釣り遊び / 『トバエ』第2次第1号 / 1887年
横浜開港資料館「フルーム・コレクション」蔵

【新聞の言論弾圧 (1888年)】

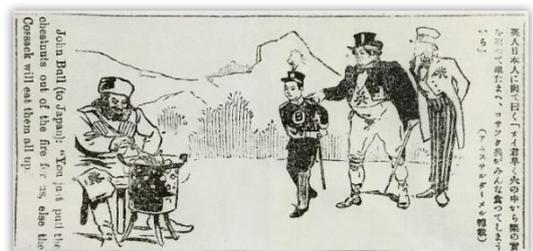
官警が風刺漫画雑誌『トバエ』を持ち、新聞記者を取り締まっている様子が描かれています。自由民権運動が盛んだった時代を風刺した作品です。窓から覗いているピエロ姿の人物は、ビゴ本人だという見方もあります。当時、フランス人は治外法権で守られていたため、取り締まりの対象にはなりにくかったという背景も影響しているのでしょう。



言論弾圧 / 『トバエ』第22号 / 1888年横浜開港資料館
「フルーム・コレクション」蔵

【火中の栗 (1903年)】

日露戦争の2年前の作品です。イギリス(大人)が日本(子供)にロシア(強靱な男)の火中の栗(大韓帝国)を拾ってくるように指示した様子を描いた作品です。日英同盟の両国間の力関係と、敵対する大国ロシアとの一触即発の緊張感が伝わってきます。



火中の栗 / 1903年 / 浜島書店『新詳日本史』

「風刺画」は、人物の特徴を捉えるのが長けていないと、描けません。それに加えて、西洋人と東洋人の描き分けも見事です。特に、ビゴはフランス人でありながら、日本人と中国人の特徴をうまく描き分けしていることから、鋭い観察眼の持ち主であったと言えるでしょう。また、何を伝えたいのかを考え、描くだけでなく、画面

構成も工夫しなければなりません。ビゴーは「エコール・デ・ボサール」で学んだ本格的な洋画家です。発想を巡らすよりも、対象を忠実に写し取る方が得意だったはずですが、ビゴーには柔軟な発想力も備わっていました。また、日本の社会を取り巻く状況を捉えなければ、これほどまでの風刺を表現できなかったと思います。

ちなみに、風刺画を得意とした代表的なフランス人画家をふたり、ご紹介します。オノレ・ドーミエ（1808年～1879年）と印象派の画家クロード・モネ（1840年～1926年）です。ドーミエは風刺画家として長年生計を立てた後、洋画家に転身しました。モネは10代の頃、小遣い稼ぎで風刺画を描き、あまりに上手だったため、外光派の画家「ブーダン」の目に留まりました。ドーミエやモネは、多様な変化を受け入れる柔軟さを持っていました。おそらくビゴーにも、そういった発想の柔軟さがあったのだと思います。

3作品の構図も、基本的に安定した構図です。西洋の伝統的な構図に近く、江戸時代の浮世絵のような奇抜で大胆な構図ではありません。そこには、西洋絵画を学んだ経験が活かされているのです。

■ 愛日家ビゴー

日光を題材にした作品だけでなく、ビゴーは、ジャポニズムに興味を持っていたものの、彼の作品にはジャポニズムの影響はあまり見られません。これもビゴー作品の特徴です。印象派の画家たちとの大きな違いは、ビゴーの関心が、浮世絵よりも日本文化そのものに向けられていた点だと、私は解釈しています。ビゴーは、ジャポニズムに魅了され、21歳で来日し、そのまま日本に住み続けた画家です。同時代のフランスの印象派の画家たちは、ジャポニズムの影響を受けつつも、来日することはありませんでした。ビゴーは、よほどの親日家、いやそれ以上に「愛日家」だったのでしょう。

■ 世界遺産たる日光



ロバート・ウィアー・アラン
(1851～1942年)

明治時代に、ジャポニズムの影響でヨーロッパから日本を描きに来た西洋人画家は、たくさんいました。そして、皆こぞって日光を描いています。その中のひとり「ロバート・ウィアー・アラン」という画家をご存知でしょうか。アランが描いた日光東照宮の作品は、100年以上前の陽明門ようめいもんの姿を忠実に表現していると思います。『日光の社寺』をこよなく愛し、ここまで真剣に描いてくれたことを、日本人として嬉しく思います。明治時代、外国人の避暑地や保養地として人気が高まった日光は、外国人画家にとっても一度は訪れてみたい憧れの日本の観光地あこがでした。『日光の社寺』の荘厳さそうごん、神秘的な自然環境、さぞかし心を洗われるような体験だったことでしょう。日光には、外国人画家だけでなく、当然多くの日本人画家も訪れ、作品を残しています。日本には現在26件の世界遺産がありますが、明治時代にこれだけ多くの画家によって描かれた世界遺産は少ないのではないのでしょうか。明治時代に、外国人画家たちをこれだけ魅了した『日光の社寺』が、約100年後に世界遺産に登録されたことも頷けます。



日光東照宮の陽明門
1907年頃
小杉放菴記念日光美術館

沼田政弘